

日本における食物アレルギー児をもつ母親に関する研究の現状

Recent Trends of Research Papers about Mothers Who Have Children with Food Allergies in Japan

鈴木 美佐¹⁾ *

Misa Suzuki

キーワード 食物アレルギー, 母親, 文献検討

Key Words food allergy, mother, literature review

抄 録

背景 わが国における育児環境は大きく変化し、乳幼児を育てる母親の育児不安や育児ストレスは深刻な状況にある。慢性疾患をもつ児の母親の育児ストレスは健康児の母親より強く、児側の要因が母親の育児不安やストレスと関連することが明らかにされている。乳幼児期に多く発症する食物アレルギー（以下FAとする）は、いまだ治療法の確立には至っておらず、除去食管理を担う母親には様々な負担が存在することが報告されている。食物アレルギー児（以下FA児とする）の母親への育児支援は重要な課題であり、日本における近年の疾患治療・検査の動向を反映させた支援の方向性を明らかにするために、母親の持つ問題の実態や研究の方向性を検討する必要がある。

目的 日本におけるFA児をもつ母親の育児に関する研究の現状を明らかにし、今後の研究の方向性を検討する。

方法 医学中央雑誌（Ver5.）を使用し、過去21年間（1991年-2012年9月）に発表された原著論文を対象に、「食物アレルギー」「母親or養育者or保護者」というキーワードを組み合わせて検索した。テーマ、シソーラス用語、研究目的およびその結果何が明らかになったのかという内容の類似性に基づき分類・分析し、FA児をもつ母親の育児に関連する問題の現状および、研究の方向性について検討した。

結果 対象となった文献は、2002年以降発表されていたもので16件であった。研究内容は分類・分析の結果「食生活の困難・負担」に関するものが最も多く、その他に「不安」「ストレス」「生活の質」「疲労」「FAの意味」があった。母親のFAについての不安やFA児の養育上の様々な日常生活上の制限や社会生活の中での調整の困難さが母親の負担を高めていた。育児ストレスやQOLについては十分明らかにはなっていなかった。

結論 1) 先行研究において、FA児を持つ母親はFAに関する「食生活の負担・困難」「不安」「ストレス」「疲労」といった問題を抱えていた。2) FA児の母親の育児ストレスについては十分に解明されておらず、その実態及び関連要因について明らかにする必要がある。3) FA児の母親のQOL関連の研究は近年になってみられていたがFA児の母親のQOLの概念や構成因子、関連要因は明らかになっておらず今後研究を進める必要がある。4) 母親への支援を検討するにあたって、育児ストレスや不安の軽減・QOLの向上のための促進因子を明らかにし、母親の育児支援の方向性について検討を行う必要がある。

Abstract

Background It is suggested that mothers with infants suffering from various food allergies (FAs) have to face a considerable burden. Childcare support given to mothers with food allergic (FA) infants is an important issue.

Objectives We investigate the current situation of studies regarding childcare of mothers with FA infant in Japan, and we also analyze the direction of future research.

Methods Medical central magazine (Ver5.) was used. A search of the previous 21 years publication was carried out using the keywords of “food allergy,” and “mother or caregiver or guardian.” Analysis of the search results was conducted. We analyzed the current situation of problems related to the childcare of mothers with FA infants and the direction of future research.

Results and Discussion There were 16 cases in the target literature. Most of the study content related to “difficulty and problem of eating habits,” and the other content concerned “anxiety,” “stress,” “quality of life,” and “fatigue.” Anxiety of a mother toward FAs and care of FA infants, and the difficulties faced due to restriction and adjustment of childcare increased a mother’s burden. There is no clear understanding on childcare stress and the QOL of mothers with FA infants.

Conclusion 1) In previous studies, mothers acknowledged the problems of “burden and difficulties of eating habits,” and the “anxiety,” “stress,” and “fatigue” related to FAs. 2) There is no clear clarification on the current condition of mother’s stress with respect to childcare and the associated factors. 3) There is no clear understanding on the concept of the QOL of mothers, contributory factors, and associated factors. 4) There is a need to clarify the influencing factors related to the reduction of a mother’s stress and anxiety of FA childcare and QOL improvemen, as well as the direction of childcare support for mothers.

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

* E-mail : suzuk-mi@seisen.ac.jp

I. 緒言

わが国における育児環境は、核家族化や少子化、メディアの拡大に伴う情報の氾濫などに伴い大きく変化し、養育者である母親の育児不安や育児ストレスは深刻な状況にあるといわれている。育児中の母親は高率で精神的な不調を自覚していること（藤田ら，2002；草野ら，2010）や、児童虐待の背景に母親の育児不安や育児ストレスが影響していること等これまでに様々な母親の心理社会的問題の存在が明らかになっている。さらに慢性疾患児や障害児などの健康障害をもつ子どもを養育する母親の育児ストレスは健康な児の母親に比べて高いこと（丸ら，1997；刀根，2002）など、看護学領域においても子どもの母親に関する研究が進められている。今日の“健やか親子21”においても多様な環境下で育児をしている母親の不安や負担に対する育児支援の重要性が強調され、支援体制の検討にあたってそのエビデンスが求められている。

慢性疾患であるアレルギー疾患のうち食物アレルギー（Food Allergy：以下FAとする）のわが国における有病率は乳児期で約10%，3歳児で約5%とされている（海老澤ら，2004；杉崎ら，2005）。FAは未だ根本的な治療方法の確立には至っておらず、基本的な対策は除去食療法や生活全般の管理によって発症を予防しながら自然寛解を待つというものである。FAをもつ子ども（以下FA児とする）の生活や除去食管理は母親によって行われており（立松，2008），その負担は大きいことが考えられる。

アレルギー疾患児の母親に関する先行研究では、気管支喘息・アトピー性皮膚炎患児の母親の育児ストレスは健康児の母親よりもストレス傾向が強いことが示唆されており（奈良間ら，1999；カルデナスら，2008），母親が抱える心理的問題やその関連因子等も明らかになってきている。しかしFA児の母親に関する研究は少なく、母親の育児に関連する問題の現状は十分明らかになっていない。FAの発症時期である乳幼児期は、その多くの母親が育児不安や育児ストレスを抱える時期と重なっているため、FA児の母親への支援を考えるにあたっては育児の側面から現状を明らかにする必要がある。

日本におけるFAに対する医学および社会的対応は近年になり急速な進展がみられている。2005年にFAの診療に関する手引きやガイドラインが相次いで発刊され、その後FAによるアナフィラキシーに対する自己注射用アドレナリンや食物経口負荷試験の健康保険適用や、FAの寛解につながる経口免疫療法等の試験的な取り組みが進められてきている。また園や学校におけるFA児への対応に関しても徐々に理解が広がりつつある。そこで今回、その現状を反映させたFA児の母親への支援を検討するにあたって、日本国内におけるFA児をもつ母親の育児に関する研究の現状を把握する必要があると考え、新たに文献検討を行うこととした。

II. 研究目的

本研究の目的は、日本におけるFA児をもつ母親の育児に関する研究の現状を明らかにし、今後の看護研究の方向性を検討することである。

III. 方法

1. 文献検索方法

1990年代以降の20年間における食物アレルギーの診療の大きな変遷をふまえ、日本のFA児の母親に関する研究の現状を明らかにするために医学中央雑誌（WEB版Ver5.）を用い、1991年から2012年9月までに発表された文献を対象に検索を行った。「食物アレルギー and 母親or養育者or保護者」をキーワードとした文献検索の結果237件が該当した。抽出した文献から会議録、重複文献ならびに診断・治療に関する症例報告、医学概説、総説、FA以外の疾患に関する文献、FA児の育児に直接関連しない文献、計221件を除外した16件を分析対象とし、FA児の母親の育児に関する看護研究の方向性について検討した。

2. 分析方法

上記対象となる文献を①発表年、②研究の種類、③データ収集法の項目ごとに分類し検討した。さらにテーマ、シソーラス用語、研究目的およびその結果の内容の類似性に基づき分類・分析し、今後の研究課題について展望した。

表1 研究内容別分類と件数内訳

内容別分類	合計	負担・困難	不安	ストレス	生活の質	疲労	FAの意味
文献数	16	9	2	2	1	1	1
割合 (%)	100	56.3	12.5	12.5	6.3	6.3	6.3

表2 FA児の母親に関する文献

	発表年	論文タイトル	著者	研究方法	データ収集方法	投稿誌
食生活：負担・困難	2011	食物アレルギー児を持つ母親の主観的困難感と看護者に望むもの	秋鹿都子 他	質的研究	半構成面接	小児保健研究. 70 (5) . 689-696. 2011
	2011	不適切な食物除去が食物アレルギー患者と保護者に与える影響	長谷川実穂 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本小児アレルギー学会誌. 25 (2) . 163-173. 2011
	2010	食物アレルギー児を行う除去食が家族・きょうだい児に及ぼす影響について	宮城由美子 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	外来小児科. 13 (3) . 306-309. 2010
	2009	食物アレルギー児の母親の食生活管理の現状と負担の関係	佐合真紀 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌. 7 (1) . 21-27. 2009
	2008	小児食物アレルギー患者における除去食解除の指標と保護者の意識調査	藤塚麻子 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本小児アレルギー学会誌. 22 (5) . 779-786. 2008
	2008	食物アレルギー児と家族の生活背景の特徴および母親の生活調整・アレルギーに関する認識	立松生陽 他	量的研究 質的研究	自記式質問紙法：自作質問票 自由記述	小児看護. 31. 7 (7) . 942-947. 2008
	2006	食物アレルギー児の存在によってその家族が受ける食生活上の影響	原正美 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票 食物摂取頻度調査票・写真法	日本小児アレルギー学会誌. 20 (3) . 210-217. 2006
	2005	乳幼児を持つ母親の離乳食に対する困難感と食物アレルギーに関する検討	畑中京子 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本看護学会論文集：地域看護. 35. 51-53. 2005
	2005	食物アレルギー患児の食餌に配慮する母親の養育態度についての質的研究	田中祥子 他	質的研究	グラウンデッドセオリー法	小児保健研究. 64 (6) . 769-778. 2005
不安	2007	食物負荷試験入院での母親の不安軽減への試み	有瀧薫 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本看護学会論文集：小児看護. 37. 291-293. 2007
	2002	重症アレルギー患児の生活改善への取り組み	古川千草 他	質的研究	事例研究	大阪府済生会中津病院年報. 12 (2) . 206-209. 2002
ストレス	2007	食物アレルギー児の母親における育児ストレスと家族対処についての研究	立松生陽 他	量的研究	自記式質問紙法： 日本語版PSI尺度・慢性疾患児 家族ストレス対処パターン尺度	日本看護研究学会雑誌. 30 (2) . 119-128. 2007
	2006	食物アレルギー除去食中の保護者に対する食生活のQOL調査および食物アレルギー児の栄養評価	池田有希子 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本小児アレルギー学会誌. 20 (1) . 119-126. 2006
生活の質	2009	食物アレルギー児と非食物アレルギー児の食生活のQOL (Quality of life) 比較調査	林典子 他	量的研究	自記式質問紙法：自作質問票	日本小児アレルギー学会誌. 23 (5) . 643-650. 2009
疲労	2010	食物アレルギー児を養育する母親の疲労とライフスタイルに関する考察 3歳児健診における質問紙調査から	土取洋子	量的研究	自記式質問紙法： 疲労スコア・Breslow健康指標	小児保健研究. 69 (3) . 423-431. 2010
FAの意味	2011	アナフィラキシー児の養育者における食物アレルギーの意味	下川伸子他	質的研究	半構成面接	小児保健研究. 70 (4) . 486-494. 2011

IV. 結果

研究内容を分析した結果、表1・表2のように6つのカテゴリーに分類できた。その内訳は「食生活の負担・困難」に関するものが9件（56.3%）と多く、次いで「不安」2件（12.5%）、「ストレス」2件（12.5%）、「生活の質」・「疲労」・「FAの意味」はそれぞれ1件（6.3%）であった。

1. FA児の食生活に関する負担・困難

FA児の母親は乳幼児期の食生活に負担・困難を感じていることが示された。母親はFA児の日常ケアのほとんどを担い大きな負担を抱えていた（立松ら、2008）。即時型アレルギーを経験した子どもをもつ母親は離乳食作りに困難を感じている（畑中ら、2005）ことや、FA児の摂取食品に必要

以上の制限をかける傾向がある（原ら、2006）ことが明らかになった。

また母親は代替食の経済的負担や、誤食によるFAの発症への不安、集団生活での食事やおやつ・外食の制限に関する負担を感じていた（藤塚ら、2008）。家族全員への除去食の実施やきょうだい児へのがまんの強要等の家族成員への影響をきたしている（宮城ら、2010）ことや、家族と違う除去食献立を別に考え調理することや給食対応の調整等（林ら、2009）に負担を感じていた。

さらに母親は社会生活を送るうえでFAに関する周囲の誤解や無理解に苦しみ、医師からは求める情報は得られず看護者は関心が低いとの思いを持っていることが明らかになった（秋鹿ら、2011）。母親の困難は「疾患・症状コントロール上の困難感」「社会生活上の困難感」「医師との関係上の困難感」

「経済的困難感」で構成されていた(秋鹿ら, 2011)。

母親の負担は、FA児の成長や生育環境の変化に伴い変遷していた。田中ら(2005)は、負担の内容について離乳期の「原因食品との遭遇と病気の受容」、幼児期の「生活スタイルの変化と摂取可能な食材の模索」、学童期の「食にかかわる社会活動への参画の保持」の3期に分かれて変化していたことを報告した。さらにFA児の自立過程において母親は、「子どもの疾患の自覚」「子どもへの疾患の説明」などの問題に直面していた(立松ら, 2008)。

医師に指示された不適切な食品除去によってFA児とその母親の負担が過度に増強されていた事例では、専門医のもとで適切な診断に基づく栄養指導に変更した結果、FA児とその母親の物理的、精神的負担が有意に軽減されていた(長谷川ら, 2011)。

2. 不安

FA児の母親はFAに関連する様々な不安を有していた。有瀧ら(2007)は食物経口負荷試験目的に入院をしたFA児の母親には食物アレルギーによるアナフィラキシーショック時の対処方法、親の目の届かないところでの管理、集団生活での食事、いつまで除去しなければならないのか等、疾患や安全への不安があったとし、それらの不安の軽減には症状別の対処方法の体験、母親同士の交流と不安を表出できる場の提供が有効であったことから検査入院の機会を生かした母親への支援の有効性、を示唆した。また古川ら(2002)は、喘息・アトピー性皮膚炎を併せ持つFA幼児の母親による生活全般に及ぶ過度の規制と不適切な育児行動がFA児の成長・発達に悪影響をきたした事例について報告し、入院と多職種介入によってFA児にとって心身ともに安全な療育環境を整備し規制を緩和させたことが、母親の心理的安定やFA児の心身の回復につながったことを示した。

FA児の母親の不安について尺度を用いて測定した研究は見当たらなかった。

3. ストレス

池田ら(2006)は自作の質問票を用いFA児の食生活の実態と食物除去に関するストレスについて調査し、保護者のFAに関するストレスの強度は除去品目数が増加するほど増加しているとした。立松ら(2007)は育児ストレス尺度(日本版PSI尺度)を用いた研究で、FA児の母親は「子ども

に問題を感じる」育児ストレスが高く、「アトピー性皮膚炎の合併」「子どもの将来に対する不安」「4品目以上除去食」は育児ストレスを高めていること、家族対処行動パターンのひとつである家族の統合的対処は母親の育児ストレスを軽減させていたことを明らかにし、家族の役割調整や相談援助を行うことの必要性を示唆した。

4. 生活の質

池田ら(2006)は、自作の質問票を用いFAに関連する保護者のストレスはそのQOLを低下させていることを考察した。治療と母親のQOLとの関連について、林ら(2012)は試験的に実施されている経口免疫療法は保護者の食生活関連のQOLの改善に寄与していることを明らかにした。FA児の母親のQOLや生活の質について定義した研究は見当たらなかった。また先行研究におけるQOL関連研究はいずれも横断的研究によるQOLの検討であり、縦断的に母親のQOLの変化を分析した研究は見当たらなかった。

5. 疲労

土取(2010)は、母子の疲労と健康生活習慣の実態について調査し、FA児の母親は、FAでない児の母親よりも疲労度が有意に高かったが、日常生活習慣の健康度に有意差はなく、健康的な生活をしていても疲労度が高いことを報告した。

6. アナフィラキシーのあるFA児の母親にとっての食物アレルギーの意味

下川ら(2011)は、アナフィラキシーの発症歴のあるFA児の養育者はFAを[死を回避する苦しい闘い]と捉えていたことを報告した。母親はFAから片時も解放されず、発症の予測できない孤独で希望の見えない苦しい闘いの中にありながら、周囲から理解されずに味方を得がたい状況におかれており、その状況を助長する要因はアナフィラキシーの理解しがたさであった、と考察した。

V. 考察

1. FA児の母親の実態について

先行研究によって、FA児を持つ母親はFAに関する「食生活の負担・困難」「不安」「ストレス」「疲労」といった問題を有していることが明らかになった。

FA児の母親に関する研究において、大きな位置を占めているのが除去食や食生活全般の実態及びその負担・困難や、症状への不安に関するものであった。FAは乳児期に発症することが多く、母親は慣れない育児の中で、生活全般におけるアレルゲンの除去をし、離乳食を進めていく。先行研究によってFAの発症に不安を抱きながら、乳幼児の離乳食や幼児食を進めていかねばならないことに悩み、栄養、誤食に関する不安を抱く母親の実態が明らかになっていた。健康な児を養育する母親にみられる育児ストレスや不安に加え、疾患由来のストレスが重なること、アナフィラキシーショックによる生命の危険を常に感じていなければならないことは、FA児の母親にとって大きな脅威である。FA幼児の栄養摂取量調査ではエネルギー・カルシウム・鉄の摂取量が所要量に比べて有意に低値であること（池田ら、2006）が報告されており、母親の除去食遂行の心理的・物理的な困難性は、FA児の成長・発育へ影響を及ぼしかねないことが明らかになった。

またこれらの母親の負担や困難は心理的負担としての不安や、身体的負担としての疲労との関連も予測された。さらにFA児の養育上の様々な日常生活上の制限や社会生活の中での調整の困難さやサポートの得られにくさが母親の負担を高めていることについても示唆された。

育児ストレスの観点から研究を行ったものは、FA児の母親のストレスとその背景要因に焦点化しQOLについて考察したもの（池田、2006）が1件、日本版PSI（Parenting Stress Index）尺度を用いて育児ストレスを測定したものが1件（立松、2007）であった。PSI尺度は米国のAbidin RR（1983）が開発した育児ストレス尺度であり日本語にも翻訳され（奈良間ら、1999）、親の育児ストレス測定に広く使用されている。同尺度の質問項目は一般的な育児におけるストレス項目が設定されているため、健康な児や他疾患児の母親の育児ストレスとの比較目的としては利用できるものの、FA児を養育する母親に特異的な育児ストレスについては十分に反映されておらず、その評価には限界がある。育児ストレス研究においては、ストレスコーピング理論（Lazarus & Folkman, 1984）を背景理論として開発された尺度を使用した研究も多数すすめられており（草野ら、2010）、今後FA児の母親の育児ストレスに

についても様々な視点から研究を進めることが望まれる。

また児の年齢や発達段階・社会的環境の変化に伴い母親の負担・困難は変化していることが複数の研究で示されていた。しかしながら先行研究において縦断的研究手法を用い母親の育児ストレスや不安の観点から時系列変化や影響因子を検討したものは見当たらなかった。乳幼児の育児ストレスに関する縦断的研究（加藤ら、2001）では、育児ストレスは2歳時点で最大となることが報告されている。FA児においても育児ストレス等と児の年齢や成長・発達段階、入園・入学等のライフイベントとの関連を長期的に分析し、FA児をもつ母親の育児に関連する問題やその支援のあり方について明らかにする視点が必要である。

FA児の母親に関するQOL研究は1件で、自作質問紙表による母親のQOL評価がおこなわれていた。FA児の除去品目数の多さはFA児の母親のQOLと負の相関があり、除去品目数を少なくすることがQOLの上昇につながると考察されている。しかしながらQOLは包括的な生活の質に関する概念であり、一部分の負担や不安の存在からQOLを解釈することには限界がある。国外では信頼性・妥当性が証明されたFA児の親のQOL尺度としてFAQL-PB（Food Allergy Quality of Life Parental Burden questionnaire）尺度（Cohenら、2004）や、FAQLQ-PF（Food Allergy Quality of Life Parent Form）尺度（DunnGalvinら、2008）が開発され、FA児の母親のQOLに関する研究が進められている。わが国においてはこれまでにFA児の母親のQOLの構成因子や関連要因を解明した研究は見当たらず、母親のQOLに関する理解は進んでいない。日本国内での信頼性と妥当性の確認されたFA児の母親に特異的なQOL尺度の開発ならびに母親のQOLの実態に関する研究が進められることが期待される。

2. FA児の母親への支援について

わが国におけるFAの診療に関するガイドライン（日本小児アレルギー学会、2011；厚生労働科学研究班、2011）は、FA児の必要以上の多品目食物除去は栄養障害のリスクや、本人や家族のQOLの低下につながるとして食物経口負荷試験等に基づいた診断により摂取可能な食品やその上限量を明らかにしたうえで積極的に食品摂取を行

うことを推奨し、必要最小限の食物除去を行うことがFA児と母親のQOLを高めアドヒアランスを向上させるとしている。林ら（2012）は、試験的に行われている経口免疫療法による摂取可能な食品の増加が保護者の食生活関連のQOLの改善に寄与していることを示唆している。またKnibbら（2011）は食物経口負荷試験前後におけるFA児の母親のQOLと不安を測定した研究で、負荷試験当日の母親の不安は有意に増加したが、試験の結果が陽性か陰性かにかかわらずその後のFA児の母親のQOLの改善につながっていたことを報告している。これは、試験の結果如何にかかわらず、摂取可能もしくは不可能な食品やアレルゲンの量が母親に理解できること、すなわちリスクの明確化が母親の対処行動のとりやすさや不安の軽減につながっていた可能性を示唆している。これらのことから、正確な診断やエビデンスに基づいた治療を進めることは、母親のQOLを改善させることにつながると期待できる。

しかしながら現状では未だにエビデンスに基づいているとはいえない治療や生活面への指示によって母親や子どもの混乱や不利益が生じている事例の報告や、母親の心情に関する理解や関心の低い医療者への不安や不信などをもち関係性に困難感を抱く母親の存在が報告（秋鹿ら、2011）されている。またアレルゲンを摂取する経口免疫療法や食物経口負荷試験などの治療や検査は、効果も期待される反面リスクも伴う。FA児の母親には、生活や治療のなかでFA児がアレルゲンを含む食品を摂取することやFA症状を発症することへの強い不安が存在することが先行研究で示されている。Knibbら（2011）は食物負荷試験を受けるFA児の母親の不安は検査当日に強くなることを示している。しかしながら日本においてFA児の治療や検査のためにFA児にアレルゲンを摂取させる母親の体験や不安に関しては十分に研究が進んでおらず、評価は行っていない。

FA児と母親のQOLの向上のためには、治療効果の追求や物理的な負担を減らすことに加えて、FA児の治療や育児全般に関連する母親の体験の包括的な視点からの理解とそれらを基にした支援が必要である。慢性疾患児の親のQOLは、育児ストレス、ソーシャルサポート、コーピング、自己肯定感と関連があることが先行研究によって明らかになっている（丸ら、1997；扇野ら、2010）。

FA児の母親に関する研究においても母親の負担や困難・不安は、知識や具体的な対処方法の獲得によって軽減されていたことが示されていることから、ストレス認知の変化やコーピング、ソーシャルサポートとしてのサポート提供者との関係が母親の負担や不安、QOLと関連があることが予測される。FA児の母親への支援を検討するに当たっては、FA児とその母親の背景と共に、精神的健康の指標としての育児ストレスや、母親の精神的健康の促進因子としての自己肯定感、ソーシャルサポート、QOLなどの肯定的な指標を考慮に入れる必要がある。その上で、母親の心情を理解出来る関係性を構築しながらFAの正しい知識と具体的な技術・情報を提供し、母親が適切な対処の方法を獲得できるよう支援体制を整備することが、重要であることが示唆される。

先行研究においてはFA児とその母親を対象とする介入研究や看護実践に関する研究は少なく、看護職による実践の実態は明らかにはなっていなかった。小児アレルギー疾患は増加傾向にあり、適切な治療の普及や患者支援のためには多くの職種の協力が必要であるが、看護者は直接患児・家族に関わり母親の不安などを一番近くで聞き取れる立場にある。看護者がFA児や母親の包括的な理解を基に、共に長期的な治療管理、生活管理、アドヒアランスの向上を計画し実践していくことは、効果的なケアへと繋がり、母親のQOLの向上にもつながっていくことと考える。これらの実践に関する研究が進められることが望まれる。日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会は、小児のアレルギー疾患に関する患者教育を担うことができる専門的なスキルをもつ看護職として小児アレルギーエデュケーターの養成を2009年に開始し、2012年現在48名のエデュケーターを認定している（日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会、2012）。今後FA児と母親に対する支援が小児アレルギーエデュケーター資格を有する看護職を中心に展開され、さらに看護実践研究として報告されることを期待したい。

VI. 結 論

我が国におけるFA児をもつ母親の育児に関する研究の現状を明らかにし、看護における研究の今後の方向性を明確にするために文献検討を行った結果、以下の結論を得た。

1. 先行研究において、FA児を持つ母親は「FAに関する不安」「食事に関する負担・困難」「疲労」「育児ストレス」といった問題を抱えていることが指摘されている。
2. FA児の育児ストレスについて十分に解明されておらず、その実態に加えて関連要因について明らかにする必要がある。
3. FA児のQOL関連の研究は近年になってみられたが、FA児の母親の生活の質について定義されたものはなく、治療・検査のQOLへの影響を含め、今後さらにFA児の母親のQOLの実態、QOLへの関連要因について明らかにする必要がある。
4. 母親への支援を検討するにあたって、育児ストレスの軽減・QOLの向上のための促進因子を明らかにし、母親の育児支援の方向性について検討を行うことと、その実践について評価を積み重ねていく必要がある。

文 献

- Abidin RR (1983) : Parenting Stress Index manual, 1st ed Pediatric Psychology Press
- 秋鹿都子, 山本八千代, 宮城由美子他 (2011) : アレルギー児を持つ母親の主観的困難感と看護者に望むもの, 小児保健研究, 70 (5), 689-696.
- 有瀧薫, 稲葉千里, 松下真紀 (2007) : 食物負荷試験入院での母親の不安軽減への試み, 日本看護学会論文集 (小児看護) 37, 291-293.
- Cohen, B.L., Noone, S., Mufioz-Furlong, A., Sicherer, S.H. (2004) : Development of a questionnaire to measure quality of life in families with a child with food allergy. *J Allergy Clin Immunol.* 114, 1159-1163.
- Dunn Galvin A, Blok Flkstra BM, Burks AW, Dubois AE (2008) : Food allergy QOL questionnaire for children aged 0-12 years content construct and cross-cultural validity. *Clin Exp Allergy.* 38 (6). 977-986.
- 海老澤元宏, 杉崎千鶴子, 池田有希子他 (2004) : 乳児期食物アレルギーの有病率に関する疫学調査, アレルギー 53, 844.
- 海老澤元宏, 五十嵐隆夫, 岩田力他 (2008) : 平成19年度食物アレルギーの診療実態に関するアンケート調査報告, 日本小児アレルギー学会誌, 22, 155-162.
- 藤原千恵子 (2004) : 入院中の小児がんの子どもをもつ母親のコーピングと状況要因および心理的ストレス反応との関連, 日本小児看護学会誌, 13 (1), 40-45.
- 藤田大輔, 金岡緑 (2002) : 乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響, 日本公衆衛生雑誌, 49 (4), 305-313.
- 古川千草, 石川郁子, 山田昌代他 (2002) : 重症アレルギー患児の生活改善への取り組み, 大阪府済生会中津病院年報12, 206-209.
- 畑中京子, 高野政子 (2005) : 乳幼児を持つ母親の離乳食に対する困難感と食物アレルギーに関する検討, 日本看護学会論文集 (地域看護) 35, 51-53.
- 林典子, 今井高成, 長谷川実穂他 (2009) : 食物アレルギー児と非食物アレルギー児の食生活のQOL (Quality of life) 比較調査, 日本小児アレルギー学会誌23, 643-650.
- 原正美, 木川真美, 多田裕他 (2006) : 食物アレルギー児の存在によってその家族が受ける食生活上の影響, 日本小児アレルギー学会誌20, 210-217.
- 藤塚麻子, 菅井和子, 船曳哲典他 (2008) : 小児食物アレルギー患者における除去食解除の指標と保護者の意識調査, 日本小児アレルギー学会誌, 22 (5), 779-786.
- 池田有希子, 今井孝成, 杉崎千鶴子他 (2006) : 食物アレルギー除去食中の保護者に対する食生活のQOL調査および食物アレルギー児の栄養評価, 日本小児アレルギー学会誌20, 119-126.
- 川尚尚, 庄司純一, 千賀悠子他 (2001) : 子ども総研式・育児支援質問紙 (ミレニアム版) の利用の手引きの作成, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 37, 159-180.
- カルデナス暁東, 末原紀美代 (2008) : アトピー性皮膚炎乳幼児をもつ両親の育児ストレスと育児の実態, 大阪府立大学看護学部紀要, 14 (1), 9-16.
- 加藤道代, 津田千鶴 (2001) : 育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的研究, 小児保健研究, 60, 780-786.
- 近藤直美 (2009) : 食物アレルギーに対する経口免疫寛容誘導療法1食べてなおす, 小児科診療 72, 1319-1326.
- 厚生労働科学研究班 今井孝成ら (2011) : 食物アレルギーの栄養指導の手引き2011, 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業, 1-20.

- 厚生労働科学研究班 海老澤元宏ら (2011) : 食物アレルギーの診療の手引き2011, 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業, 1-14.
- 草野恵美子, 小野美穂 (2010) : 社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響, 小児保健研究, 69 (1), 53-62.
- 丸光恵, 兼松百合子, 中村美保他 (1997) : 慢性疾患患児をもつ母親の育児ストレスの特徴と関連要因-健康児の母親との比較から-, 千葉大学看護学部紀要, 19, 45-51.
- 松本美江子, 河原秀俊, 赤司賢一他 (2003) : 小児食物アレルギーの養育者不安に関する質的研究, アレルギー 52, 914.
- 奈良間美穂, 兼松百合子, 荒木暁子他 (1999). 日本版Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討, 小児保健研究. 58 (5), 610-616.
- 日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員会 (2011) : 食物アレルギー診療ガイドライン2012, 協和企画.
- 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会HP(2012.11.1 取得) : <http://jspiaad.kenkyuukai.jp>.
- 野村真利香, 堀口逸子, 丸井英二 (2006) : 一般世帯および食物アレルギー患者世帯における食品表示などの利用状況 妊産婦教室および乳幼児教室の参加者を対象として, 厚生指標53 (15), 31-36.
- 扇野綾子, 中村由美子 (2010) : 慢性疾患患児を育てる母親の心理的ストレスおよび生活の満足感に影響を与える要因, 日本小児看護学会誌, 9 (1), 1-7.
- R.C.Knibb, N.F.Ibahim, G.Stiefel et al (2011) : The psychological impact of diagnostic food challenges to confirm the resolution of peanut or tree nut allergy, Clin exp Allergy, 42, 451-459.
- 佐合真紀, 浅野みどり, 伊藤浩明他 (2009) : 食物アレルギー児の母親の食生活管理の現状と負担の関係, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会7, 21-27.
- 杉崎千鶴子, 池田有希子, 田知本寛他 (2005) : 3才児アレルギー性疾患の有病率調査, 相模原コホート研究, アレルギー 54, 1085.
- 田中祥子, 稲田浩, 新宅治夫他 (2005) : 食物アレルギー患児の食餌に配慮する母親の養育態度についての質的研究, 小児保健研究64, 769-778.
- 立松生陽, 市江和子 (2007) : 食物アレルギー児の母親における育児ストレスと家族対処についての研究, 日本看護研究学会雑誌30, 119-128.
- 立松生陽, 市立和子 (2008) : 食物アレルギー児と家族の生活背景の特徴および母親の生活調整・アレルギーに関する認識, 小児看護31, 942-947.
- 刀根洋子 (2002) : 発達障がい児の母親のQOLと育児ストレス-健常児の母親との比較-, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15, 17-23.